

氏 名 りゅう さ
 劉 莎

学 位 の 種 類 博士（文学）

報 告 番 号 甲第 1592 号

学位授与の日付 平成 28 年 3 月 22 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当（課程博士）

学 位 論 文 題 目

Subsidiary Stress Assignment of Derived Words in English

論文審査委員（主 査）	福岡大学	教授	山田 英二
（副 査）	福岡大学	教授	久保 善宏
	福岡大学	教授	ハッチャー,J.T.
	佐賀大学	教授	小野 浩司
	東京大学	教授	田中 伸一

内容の要旨

本論文の目的は、イギリス英語の副次強勢配置を Yamada (2010) の枠組みで分析し、その枠組みおよび主張の妥当性を検証すると共に、イギリス英語の強勢変異形の出現メカニズムを明らかにすることにある。

本論文は序論、本論（第Ⅰ部、第Ⅱ部）、結論、および参考文献によって構成される。

序論では、本論文の構成および強勢の定義について議論がなされる。

本論の第Ⅰ部は第2章と第3章に該当し、本研究に関わる先行研究の批判的検討と現状分析が示される。第2章では、主に Chomsky and Halle (1968) *The Sound Pattern of English* (以下、*SPE*) を取り上げ、その強勢配置規則の分析を行う。ここで古典たる *SPE* を敢えて取り上げる理由は、それが生成音韻論の基礎を築いた基本的文献であるにも関わらず、Yamada (2010) においては、詳細な考察がなされていないからである。この章では、本論文の中心課題である副次強勢に関する *SPE* での分析方法と問題点を、特に *condensation*, *electricity*, *information* 等に代表される語群の分析を通して、明らかにしていく。次に、第3章においては、「韻律理論」、特に Liberman (1975), Liberman and Prince (1977), Halle and Vergnaud (1987) における副次強勢の分析を詳細に検討する。これも、*SPE* の問題点を解決しようとした韻律理論の最重要文献といえる Liberman (1975) および Liberman and Prince (1977) に対する検討が、Yamada (2010) ではなされていないためであり、その意味でも、この章も第2章同様、Yamada (2010) での考察の不備を補完するものとなる。これらの韻律理論の分析を通じて明らかとなるのは、韻律理論は *SPE* での問題点の解決を目指してなされたものであるにも関わらず、結局のところ、この理論もまた、特に副次強勢に関わる語群の説明においては、例外的な取り組みと言わざるを得ない「語彙的 (lexical) 説明」を導入するのみで、*SPE* で明らかとなった問題点を解決するには至っていないということである。

本論の第4章から第7章を占める第Ⅱ部においては、Yamada (2010) で提案された「位置関数理論」を概説したのち、それに対して批判的検証を行い、いま問題としている英語、特にイギリス英語の副次強勢配置をこの理論を用いて説明できるか否かに焦点が置かれる。というのも、Yamada (2010) の分析は、アメリカ英語を基にしているため、Yamada (2010) の理論が適正な音韻理論としての価値を持つならば、それはイギリス英語および他の多様な英語にも適用可能で

あるはずだからである。

つまり、第4章では位置関数理論の概説およびそこで仮定されている16個の「位置関数」の説明を、各種の語群例、特に *SPE* や韻律理論において十分な説明ができなかった語群例を基にして、行う。

第5章においては、位置関数理論において仮定されている16個の位置関数の妥当性を英語の強勢配置に関わる各種パラメータという観点から検証すると共に、データベースを用いてそれらを量的に検証する。この量的検証には、イギリス英語の17万語の語彙を収録する「CELEX Lexical Database 2」という電子語彙データベースを用いる。この検証により、16個の位置関数には、それ自身固有の動機付けを有するものがあるだけでなく、全ての位置関数が量的・統計的にも仮説としての有効性を保持していることが明らかとなる。

第6章では、イギリス英語における強勢変異形の分析を行う。いかなる音韻理論であれ変異形の分析は避けては通れない重要課題だからである。これに関する本論文における提案は次のようになる。「語彙的 (lexical) 取り扱い」や、位置関数の「選択的 (optional) 適用」がないもの、つまり、各種位置関数の適正な適用のみで出現する強勢型を「デフォルト (default) 形」と定義する。さらに、そうではないもの、つまり、語彙的取り扱い、位置関数の選択的適用が必要なものの、あるいはそれらの組み合わせで出現する強勢型を「代替 (alternative) 形」と定義し、最終的に強勢変異形を大きく2種類に分類する。この分類によれば、例えば、*electricity* という語では、*elèctricity* (02103) [注: 1 = 第1強勢、2 = 第2強勢、3 = 第3強勢、0 = 無強勢] は「デフォルト形」、*èlectricity* (20103) と *èlèctricity* (23103) は「代替形」ということになる。このように、位置関数理論においては各種の強勢変異形を体系的に説明するのが可能だということが分かる。

第7章では、各種の位置関数間の順序関係を考察する。Yamada (2010) では、各種の位置関数間の順序関係について特に議論がなく、位置関数の起動は瞬時になされると仮定されている。本論文では、これらの位置関数の起動条件を詳細に分析した結果、各種の位置関数間に適用上の「順序関係」や「依存関係」が存在することが明らかにされる。考察に用いたのは、*SPE* や韻律理論においても問題とされた *còndensátion* (2310), *còndensátion* (2010) 等の2種類の強勢変異形を持つ語群、および *informátion* (2010) 等のこれまで常に問題とされてきた語群である。

最後に、著者は結論において、Yamada (2010) による位置関数理論を用いると、

イギリス英語の副次強勢配置は、その強勢変異形の出現を含めて、原理的・体系的な説明が可能であると結んでいる。

審査の結果の要旨

本論文は、イギリス英語の副次強勢配置を Yamada (2010) で提案された「位置関数理論」の枠組みで分析し、その枠組みおよび主張の妥当性を検証すると共に、イギリス英語の強勢変異形の出現メカニズムを明らかにしようとするものである。

「副次強勢」とは、「主強勢」以外の、語中で第 2 番目、第 3 番目に強く発音される音節の母音の強さのことである。「位置関数理論」では、この副次強勢の出現位置を、従来の各種の理論的枠組みよりもより良く予測できるという。本論文での議論はこの位置関数理論を中心として展開されている。

以下は、本論文の査読、口頭試問、公聴会を通して行われた本論文に対する審査委員会での主な審査内容・評価および結果である。

(1) 本論文では、副次強勢に関する議論の先行研究として *SPE (The Sound Pattern of English)* (Chomsky and Halle 1968)) と Liberman (1975), Liberman and Prince (1977) が採り上げられ、それらにおける副次強勢の取り扱いが詳細に議論されている。生成音韻論の出発点といえる *SPE* と、その後の韻律理論の嚆矢となる上記 2 篇の論文は、この分野での議論においては必須の文献であるが、実は Yamada (2010) においては、採り上げられていない。故に、本論文において、それらを採り上げ、その意義と問題点の指摘を行った点が評価できる。ただ、先行研究ということであれば、Hayes (1980/1981) や、最適性理論 (OT) などの諸研究にも言及があれば、更に議論が深まったのではないかという意見もあった。

(2) アメリカ英語の分析を行った Yamada (2010) に対して、本論文では、イギリス英語の分析を行い、位置関数理論の各種の位置関数をパラメータとして用いた点が評価された。

(3) 上記 (2) の分析過程において、イギリス英語での強勢変異形 (stress variants) に着目し、それらを「デフォルト形」と「代替形」の 2 種類に分け、前者は「語彙的 (lexical) 取り扱い」や位置関数の「選択的 (optional) 適用」が見られず、各種位置関数の適正な適用のみで出現するとし、後者は語彙的取り扱いがなされるもの、語彙的取り扱いと位置関数の選択的適用とが組み合わされて用いられるものがあることを明らかにした点も注目に値する。ただ、「デフォルト形」に対しては、理論内的証拠のみではなく、独立した証拠 (例えば、統計的証拠、言語獲得上の証拠、歴史変化における証拠など) を示すことができる

と更に良かったのではないか、また、「代替形」に対するパラメータ設定は各語群固有に設定されるのみではなく、連動的・体系的になされる可能性を迫及することも、今後の研究課題の一つとなるのではないかという指摘もあった。さらに、上記 (2) にも関連することではあるが、アメリカ英語とイギリス英語の相違は、強勢変異形のみに見られるのか、「デフォルト形」の中には両者の相違は見られないのかという点も、将来の研究課題となるだろう。

(4) 個々の位置関数の有効性の検証を、17 万語の語彙を擁するイギリス英語の電子語彙データベース「CELEX Database 2」を用いて量的に行ったことも注目に値する。これにより、16 個の位置関数には、それ自身固有の動機付けを有するものがあるだけでなく、全ての位置関数が量的・統計的にも仮説としての有効性を保持していることが示されている。独創的な研究成果といえる。とはいえ、それぞれの位置関数は孤立的に存在するのではなく、それぞれが組み合わせられることでより強力に働くという点を強調できれば更に良かったと思われる。

(5) 個々の位置関数間の順序関係及び関係性について詳細な議論を行っている。Yamada (2010) では、各種の位置関数間の順序関係については特に議論がなく、位置関数の起動は瞬時になされると措定されている。それに対して、本論文では、それぞれの位置関数の起動条件を詳細に調べ、互いに密接な順序関係や依存関係が存在することを明らかにした。

以上、本論文は、Yamada (2010) による位置関数理論に立脚しつつも、単にその枠内に留まるばかりではなく、過去の先行研究における副次強勢配置現象の取り扱いの不備を指摘し、イギリス英語における強勢変異形の出現をパラメータ的に取り扱うことができるという新しい見方を提示していること、更には、その達意の英文と相俟って、各章の論理構成、説得力のある主張、発想の独創性と言う点からみても、博士の学位論文に十分に値すると判定された。